

メアリ・ウルストンクラフトのルソー批判

岩 渕 剛

岡崎女子短期大学研究紀要45号 抜粋

平成24年 3 月25日

メアリ・ウルストンクラフトのルソー批判

岩 渕 剛*

要 旨

「この小論で取り上げようとしたのは、女性解放思想の草分け的存在であるとされる、メアリ・ウルストンクラフトによる、ジャン・ジャック・ルソーの女性観批判の内容と、その今日的意義である。生まれながら自由・平等な自立した個人（近代市民）によって作られたはずの、近代市民社会が成立して200年以上たつ今日なお、彼女によって提起された女性解放の諸課題の多くは、解決されないままである。この小論は、男女の実質的平等実現の前進のために、「男女共同参画社会基本法」が作られ、国連女性機関もできている今、彼女のルソー批判の内容とその意義を、再確認しようとするものである。」

Abstract

In Chapter 5 of "A Vindication of the Rights of Women", Mary Wollstonecraft criticized J. J. Rousseau's view of Women intensively. Despite of his assertion about Universal Human Rights of all the citizens in modern Civil Society, he was excluding Women and Girls from the equal membership of Modern Civil Society. Therefore, Women were only subordinate members of the Civil Society like Home, Community, States etc. Main point of her Criticism was negligence of understanding and reason in Women.

はじめに

本稿の狙いは、「女性解放思想を初めて体系的に樹立した」（注1）メアリ・ウルストンクラフト（1759～1797）の、ジャン・ジャック・ルソーの女性観批判の内容を検討・確認し、その今日的意義を考察することである。

ジャン・ジャック・ルソー（1712～1778）は、フランス革命の「人権宣言」に集約的に表現された近代社会思想を述べた、代表的な近代社会思想家である。ルソーは、前近代の身分制秩序から解放された、生まれながら自由平等な個人としての近代市民の在り方を、人間の本来の在り方であるとした。その意味では彼は、フランス革命に先立って、人々を封建的身分秩序から解放した近代社会思想家であると評価されてきた。（注2）

しかし、ルソーが解放しようとしたのは、前近代の身分的差別に苦しむ、女性を含むすべての人々だったのであるか。ウルストンクラフトは、そうではないという。ルソーが解放しようとしたのは、男性のみで、人類の他の半分を占める女性は、ルソーにとっては、男性と平等に前近代の身分的差別から解放されるべき存在ではなかったと。彼女は、ルソーの代表的著作の一つである『エミール』第5編の、

女性観を集中的に展開した該当箇所から長文を引用し、それらに批判的なコメントを加えてゆく。

1. 男性と女性の類似と相違

まず、『エミール』の第5編の記述に沿って、男女の類似と相違についてのルソーの所説を見てみる。

(1) 男女の身体的な類似と相違

ルソーは、男性と女性の類似と相違について、身体的特徴と精神的特徴に分けて、次のように言う。「性に関係のないあらゆる点においては女は男と同じである。同じ器官、同じ必要（besoins。樋口訳は、欲求。）（注3）、同じ能力を持っている。機械は同じ方式で組み立てられ、部品も同じで、一方の動き方は他方の動き方と同じだし、格好も同じようなものだ。・・・性に関係のあるあらゆる点においては、女と男には、どこを見ても関連（rapport。今野一雄訳、『エミール』、岩波文庫、下、6ページ。樋口謹一訳は、類似。）があり、どこを見ても相違（différences。今野訳、同上。）がある。両者を比較することの難しさは、両者の構造に見られる。・・・わたしたちが確実に知っているただ一つのは、両者に共通することはすべて種に属する

* 岡崎女子短期大学名誉教授

ということ、違っているものはすべて性に属するということだ。」(注4)

ところが両者の比較は難しい。というのは、性に関係したところとそうではないところとの関係が、よく分からないからであると。

(2) 男女の精神的な類似と相違

「そういう類似と相違は、当然、道徳的なこと(morale。今野訳、7ページ。樋口訳は、精神)に影響を与える。これは明らかなことで、経験と一致しているし、男女の優劣とか平等とかいうことについての議論のむなしさを証明してもいる。それぞれの性は、別々の使命に従って自然の目的(fins de la nature)に向かっていくのだが、それでは両者が互いにもっとよく似た場合よりも完全ではないとでもいうのだろうか。共通に持っているものから考えれば、両者は平等なのだ。ちがっている点から考えれば、両者は比較できないものなのだ。」

つまり、男性と女性の身体上の類似と相違は、道徳的なこと(精神)の類似と相違にも影響を与える。それではどのような影響を与えるのであろうか。ルソーはここで、男女の優劣とか平等に関する議論そのものが空しいとして、事実上議論を断ち切ろうとする。この議論に関する結論を、男女が共通にもっているもの(「道徳的なもの(精神)」)の中で男女が共通して存在するものから考えれば、男女は平等である。しかし男女で違って存在しているものの点から考えれば、男女の優劣、平等は比較できないとする(同上箇所)。男女は、「別々の使命にしたがって(selon sa destination particulière。今野訳、7ページ。樋口訳は、それぞれ特殊の使命にしたがって。66ページ。)自然の目的に向かっていく」。

(3) 「性の交わり」が男女の精神的な相違の源

「性の交わり(union des sexes。今野訳7ページ。樋口訳は、両性の結合。66ページ。)においてはどちらの性も同じように共同の目的に協力しているのだが、同じ流儀によってではない。その違った流儀(diversité)から両性の道徳的な関係(rapports moraux。今野訳は、同上。樋口訳は、精神的関係。同上。)における最初のはっきりした相違(prémière différence。今野訳は、同上。樋口訳は、最初の相違。同上。)が生じてくる」。

つまりルソーによると、男女とも自然の目的実現のために協力し合っているのだが、性の交わりにおいてはじめて、男女の道徳的な関係(樋口訳は、精神的な関係)における最初のはっきりした相違が生まれる。ところが、この性的交わりにおける事実か

ら、以下の命題が引き出される。

「一方は能動的で強く、他方は受動的で弱くなければならない。必然的に、一方は欲し、力を持たなければならない。他方はそんなに頑強に抵抗しなければそれでいい。」(同上)。しかしルソーは、事実命題を当為命題にするという論理的飛躍を犯しながら、男性の能動性・強さ、女性の受動性・弱さ、したがって男性の意思と力、女性のあまり「頑強に抵抗しない」ことといった男女の精神的特性を、当為として主張する。

(4) 女性は男性に気に入るようにするために生まれついている

ルソーは、男女の精神的特性に関する当為命題を、さらに進んで「自然の法則」にしてしまう。

「この原則が確認されたとすれば、女性は特に男性の気に入るようにするために生まれついている、ということになる。男性もまた女性の気に入るようにしなければならないとしても、これはそれほど直接に必要なことではない。男性のねうちはその力にある。男性は強いということだけで十分気に入られる。これは恋愛の法則ではない……これは自然の法則であって、恋愛そのものにさえ先行することだ。」(同上)。

この自然法則にされた事実命題から、ルソーはさらに、女性の「慎みと恥じらい」(la modestie et la honte。今野訳9ページ。樋口訳67ページ。)を導き出す。

「女性は、気に入られるように、また、征服されるように生まれついているとするなら、男性に挑むようなことはしないで、男性に快く思われる者にならなければならない。女性の力はその魅力にある。その魅力によってこそ女性は男性に働きかけてその力を呼び起こさせ、それをういさせることになる。男性の力を呼び起こす最も確実な技巧は、抵抗することによって力の必要を感じさせることだ。そうになると欲望に自尊心が結びついて、一方は他方が獲得させてくれる勝利を勝ち誇ることになる。そういうことから攻撃と防御、そして、強い者を征服するように弱い者に与えている武器、慎しさと恥じらいが生じてくる。」(同上。今野訳、8～9ページ。樋口訳、67ページ)。

つまり、「能動的で強い」男性という性は、「受動的で弱い」女性という性を、力で征服しようとする。女性はその魅力によって男性に働きかけ、男性に女性を征服する力を呼び起こさせる。その最も確実な技巧は、男性が征服しようとしても抵抗して、簡単

には征服させないことである。女性の抵抗に打ち勝って女性を征服した男性は、女性の抵抗に対する勝利を勝ち誇ることになる。しかしこの勝利は、実は女性が男性に獲得させてくれたものなのである。すなわち、恋愛関係成立に先立って行われる男女の間の性的攻防・葛藤を通じて、男性の攻撃性・大胆さが生まれ、女性の防御性・臆病、「強い者を征服するように自然が弱いものに与えている慎みと恥じらい」が生じてくる。

「そういうわけで、女性は、・・・必ず男性をつきのけ、拒絶するのだが、何時も同じ程度の力でそうするのではなく、したがって、何時も同じ結果に終わるわけでもない。攻める方が勝利を得るためには、攻められるほうがそれを許すか命令するかしなければならぬ。・・・あらゆる行為の中でこの上なく自由な、そしてこの上なく快いその行為は、本当の暴力 (violence réelle。樋口訳は、真の暴力) というものを許さない。自然と道理 (la nature et la raison。樋口訳は、自然と理性) はそういうことに反対している。自然は弱者にも、その気になれば、抵抗するのに十分な力を与えているのだし、道理から言えば、本当の暴力は、あらゆる行為の中で最も乱暴な行為であるばかりでなく、その目的に全く反したことなのだ。というのは、そんなことをすれば、男性は自分の伴侶である者に向かって戦いをはじめ (déclare la guerre à。樋口訳は、に対して宣戦布告する) ことになり、相手は攻撃してくる者の生命を犠牲にしても自分の体と自由 (sa personne et sa liberté。樋口訳は、自分の身と自由) を守る権利を持つことになるし、また、女性だけが自分の置かれている状態の判定者なのであって、あらゆる男が父親の権利を奪い取ることが出来るとしたら、子供には父親というものがいなくなるからだ。」(同上。今野訳、11～12ページ)。

ルソーはこの性の交わりを、「あらゆる行為の中でこの上なく自由な、そしてこの上なく快い行為」という。つまり男女の性的交わりにおいては、男性が自らの性的欲望を満たそうと女性に攻めかかる。しかし女性は、まず初めは男性の要求を拒否する。女性による拒否にもかかわらず男女の性的交わりが、「この上なく自由な」「この上なく快い」行為として男女両者に受け止められるのは、最初は拒否した女性が男性の要求を「許すか命令するか」するからである。

(5) 「本当の暴力」は許されない

したがって、男女両性にとって自由で快い行為と

して成立する性的交わりにおいては、「本当の暴力」は許されない。ルソーがこのことばで具体的には何を言おうとしたのかは明らかではないが、男性による女性の強姦などが想定されていると思われる。強姦などの「本当の暴力」は、「自然と道理」に反しており、「あらゆる行為の中で」最も乱暴な行為であるばかりでなく、その行為の目的に、つまりそれぞれに自由で快い行為をしようという男女の性的交わりの「目的に全く反したこと」になる。というのは、男性による女性に対する「本当の暴力」は、男性による自分の伴侶に対する宣戦布告になり、女性のほうは、攻撃してくる男性の生命を犠牲にしても自分の体と自由を守る権利があるということになるからである。

またルソーは、男性との性的交わりの結果妊娠した場合に、女性だけがその子の父親が誰であるかの判定者であるとする。強姦によって妊娠させた男性が、相手の女性による判定を無視して父親としての権利を主張できることになったら、子供には本当の父親というものはいなくなってしまうともいう。(『エミール』今野訳、13ページ)。

(6) 強者は弱者に依存している

ルソーは、「性の構造にもとづく第三の帰結」なるものを述べる。「それは、強者は見かけは支配者だが、実際には弱者に依存しているということだ。そして、こういうことは・・・変わることはない自然の掟の一つ (une invariable loi de la nature。今野訳、12ページ。樋口訳は、不変の自然法。69ページ) によるのだ。自然は、女性には容易に欲望を刺激する能力をあたえ、男性にはそれほど容易に欲望を満足させる力を与えないで、男性をいやでもおうでも女性の気分に依存させ、男性もまた女性の気に入るようにして、自分を強者にしてくれることを相手が承知してくれるように努力しないわけにはいかになくしているのだ。・・・女性の精神 (esprit des femmes) は完全にその構造に対応している。自分の弱さを恥ずかしく思うどころか、女性はそれを名誉にしているのだ。女性の柔らかい筋肉には抵抗力がない。女性はほんの軽い荷物でさえもちあげることができないようなふりをする。なぜそうなのか。それは、きゃしゃに見せかけるばかりではない。もっと巧妙な心がけを持っているからだ。女性は必要に応じて弱いものになる口実と権利をあらかじめ手に入れようとしているのだ。」(同上。今野訳、12～13ページ)。

ルソーは、能動的で強い性であるはずの男性が支

配者であるのは見かけだけであって、じっさいには受動的で弱い性である女性に依存しているのだという。男性は女性が男性を気に入り、男性が女性を征服することを承知してくれるように努力する必要がある。つまり、女性は、受動的で弱い性なのだが、能動的で強い性である男性に対して、自らの欲望の充足や権利の尊重を認めさせることが出来るのである。しかもこのことが、自然の掟（自然法）のひとつであるという。

2. メアリ・ウルストンクラフトのルソー批判

(1) ルソーの女性観・・・メアリによる要約

「ルソーは言う。エミールが完全な男性であるのと同じように、ソフィーは完全な女性でなければならない。そして、彼女を完全な女性にするためには、自然が女性にいかなる性格を与えたかを検討することが必要であると。彼はさらに進んで、女性は、男性よりも肉体の力が劣るということを理由に、弱く受動的であるべきだと論証しようとする。そして、そのことからして、女性は男性を喜ばせ、また男性に従うように作られているのだ、また彼女の主人の意にかなう人になる — これが女性の生涯の大きな目的なのだ — ことこそが女性の義務なのだ、と結論する。しかしながらルソーは、それでも肉欲（lust）については、何とかもったいをつけながら、男性が女性との快楽を求める時には、力に訴えるのではなく女性の意思に従うべきであると主張する。」（『女性の権利の擁護』、152～153ページ。）

メアリによるルソー女性観の要約は、簡潔であるが正確である。上述したように、ルソーの男性と女性の類似と相違についての説は、身体における男女の相違から始まる。男性は身体的に（肉体的に）強くそれに比べて女性は弱い。そのことが精神における男女の特徴の違いを作り出す。とりわけ性的交わりにおける男性の能動性と力、女性の受動性と弱さそして慎みと恥じらいが、自然の掟（自然法）とされる。しかし男女の性的交わりにおいては、女性の了解・承諾を無視した男性の力づくでの女性攻撃・征服（強姦など）は、自然の掟にもとる許されない行為である。このような男性の攻撃に関しては、女性は男性に命の危険を犯させるだけの力を、自然は与えているとする。

(2) 女性は男性のために創造されたか

「女性は男性を喜ばせ男性に服従するためにのみ作られたものであると仮定するならば、ルソーの結論は正しい。女性は男性の意にかなう人になるため

に、他のあらゆる配慮を犠牲にするべきである」。この見方に対してメアリは、疑問を呈する。そして自らのこの疑問を、「理性の示唆（suggestion of reason）」と呼ぶ。（同前、154ページ）。

3. ルソーの女性教育論批判

メアリーは、『エミール』から、ルソーの女性教育に関する長い記述を、引用する。その要点は、以下のとおりである。

(1) 女性は男性とは異なった方法で教育されるべきである。

「男性と女性は気質や性格が同じように造られていないし、造られるべきでもない、ということが一たん示されるならば、当然男女は同じ方法で教育されるべきではないことになる。」（同前）。

「女性特有の使命を考えてみても、彼女たちの傾向を観察してみても、彼女たちの義務に注意を払ってみても、あらゆることが全て、女性に最もふさわしい特殊な教育方法を指摘することになる。」（同上）。

(2) 女子教育の義務は男性を喜ばせること

「この理由で、女子教育は常に男性に関連してなされるべきである。男性を喜ばせること、その役に立つこと、男性に愛され尊敬されること、男性が幼いときには教育し、大人になった時には世話をやくこと、男性に助言を与え男性を慰めること、男性の生活を楽で心地よいものにする、このようなことは、どんな場合にも女性の義務であり、女性が小さいときから教えられなければならないことである。」（同上）。

(3) 女性にも体力は必要、でも目的が違う

「ある意味で肉体は魂より先に生まれてくるのであるから、我々は最初にせつせと体を造るように心がけなければならない。この順序は男女に共通であるが、体を作る目的は異なっている。男性においては、目的は体力を強化させることであり、女性においては、容姿の魅力を増すことである。強さや美しさという特質は、いずれも男女のそれぞれが独占すべきものではない。それらを身につける順序が、逆になっているだけである。女性だって身のこなしや振る舞いを優雅にしうだけの十分な力が必要なことは確かであり、男性もらくらくと行動するための技巧を十分に必要とすることは確かである。」

(4) 少年と少女の遊びの違い

「子供たちは、少年も少女も共通の遊びをたくさん持っているし、それはまた当然のことである。彼

らは成長した時にも、共通した遊びを沢山持っているのではないか?しかし男性と女性は、遊びにおいて自分たちを区別する独特な好みをも、また持っている。少年は騒がしくて活発な遊びを好む。太鼓をたたき、こまをまわし、小さな車を引っぱり廻す。それに対して少女は、見せびらかしたり飾ったりするものが好きだ。たとえば、鏡や細かい装身具や人形で、人形は女性特有の遊び道具である。そして、ここからわれわれは、女性の好みが彼女たちの運命に明らかに適合していることが分かる(同上。156～157ページ)。

(5) 少女には、すぐ役に立つことを教えるべし

「かわいらしい少女が、どうやって人形にきれいな着物を着せるか、どうやって人形の袖飾りやひだ飾り、頭飾りなどを作るのかを熱心に知りたがることは確かであろう。・・・だから、普通、このような少女に最初に教えるものには、十分理由があることがわかかる。すなわち最初は、難しいことを教えないで、すぐに役立つことを教えて感謝されるのだ。」(同上。157ページ)。

メアリは、ルソーの以上のような女性教育論に強く反発し、厳しい批判を加える。

「これは確かに知性のかけらもない、肉体を動かすだけの教育である。・・・そこで、容姿をか弱く見せるために、美しいといわれるようになるために、知性は無視されるのだ。そして、少女は、おとなしく坐って人形と遊び、おろかな会話に耳を傾けるように強いられる。習慣によって生まれた結果が、まぎれもなく自然の指示するところのものだ、と強調されるのだ。」(同上。157～158ページ)。

メアリは、ルソーの女子教育論を非難する。「容姿をか弱く見せるために、美しいといわれるようになるために、知性は無視される」と。長い間の習慣によって女性のなかに生まれ身につくことになった結果が、ルソーによって自然の指示だとされる。」と(同上。158ページ)。

(6) フランスの少女教育

「フランスにおいては、少年少女、特に少女は、人を喜ばせるように、容姿をきれいに見せるように、立ち居振る舞いに気をつけるようにとだけ教育される。そして彼女たちの精神は、でしゃばってはならぬという世俗のおよび宗教的な注意に災いされて、ほんの子供の頃からすでに腐敗しているのだ。・・・そして社会は、媚と手管を教える学校であった。10歳や11歳で、いや、しばしばそれよりももっと早くから、少女は媚びることを始め、そして、

玉の輿に乗るような結婚をしたいと、誰はばからずいうのであった」。

メアリは、フランスにおける女子教育の当時の状況を、描写している。結局ルソーは、フランスにおけるこのような女子教育の結果を、女性の自然だと見做しているとする。しかも、このような女性に対する差別的な見方・教育観は、彼の女性を性的に支配しようとする欲望が、彼の理性の働きを乱れさせたことによって生じたものと見ている。

それゆえ、そのような女性観に基づくルソーの女性教育観は、「ずるさと好色に基づいた一体系」(同上。154ページ)であるにすぎないということになる。

(7) 厳しい束縛に従う必要

ルソーは、女性が厳しい束縛に従う必要を、次のように強調する。「彼女たちは一生の間絶えず、この上なく厳しい束縛——つまり礼儀作法という束縛——に従わなければならない。それ故に、後になって苦しむことのないように、早くからそのような拘束に慣れさせることが必要である。そしてまた、他人の意思にたちどころに服従できるように、自分の気まぐれを押さえることに慣れさせることが必要である。・・・今日の不合理な制度の下においては、慎み深い女性の生涯は、自らとの絶え間ない闘いと化している。」(同上。158ページ)。

メアリは、ルソーのこの主張に、次のように反論する。「慎み、節制、そして克己は、理性の厳粛な発露 (sober offspring of reason) である。しかし知性 (understanding) を犠牲にすることによって、感受性 (sensibility) だけを磨いていくような愚かな存在は、専横なやり方で束縛される必要があり、その結果、絶えざる戦いを経験しなければならない。けれども、彼女たちの精神 (mind) に、もっと大きな活動分野を与えてみよ。そうすれば、もっと高貴な情熱と動機 (nobler passions and motives) が、彼女たちの欲望と感情 (appetites and sentiments) を統御するであろう。」(同上。160ページ)。

(8) 一生涯必要な従順さ

「こうして、束縛の習慣を身につけることによって、女性にとって一生涯必要な従順さが生まれる。なぜ生涯必要かという、女性は男性に、あるいは男性たちの判断にいつも服従していなければいけないし、また、男性たちの意見に超然としているようなことは決して許されないのだから。女性にとって第一の、そして最も大切な資格は、気立てが良くくて優しい (good-nature or sweetness of temper) と

いうことである。しばしば悪徳 (vice) に満ち、常に欠点だらけの男性の如き不完全な存在に服従するように造られている女性は、早くから、不正を忍ぶことも学ばなければならないし、また不平を言わずに夫の侮辱に耐えなければならない。」(同上。161ページ)。

ルソーは、ここでも自然を持ち出す。女性は、理性・知性とは無関係の、礼儀作法といった権威によって束縛される習慣を身に着けることが必要なのは、そのことによって一生涯必要な従順さを身に着けることが出来るからだという。一生涯必要とされるのは、女性という性は男性に服従する性でなければならないように、自然によって造られているからである。

メアリは、ここでも短くしかも鋭くルソーに反論する。「盲目的な服従が主張されて、人類の神聖な権利は、全て侵害されているのだ。最も神聖な権利は、男性だけのものである、とでもいうのであろうか。」(同上)。メアリによると、ルソーは人類の神聖な権利を明らかにしたはずなのだが、人類の一員であるはずの女性には、その権利が認められていないことになる。

(9) 良い性質を形成することは、理性の仕事である

メアリは、女性に、男性による不正を忍び侮辱に耐えることを求めるルソーに、反論する。「忍耐強く不正に耐え、また侮辱されても黙ったままにいるような人は、やがて自分も不正な人間になるか、あるいは善悪を見分けることが出来なくなるであろう。・・・良い性質を形成することは、理性の冷静なる仕事であって、理性は、我々が成長するにつれて対立する要素を巧みに調和させていくのである。」(同上。161～162ページ)。

(10) 偉大な精神はずるさ (cunning) や技巧 (address) と両立しない

メアリは、女性には「策略」(subtilty) や「技巧」(address) が必要であるとするルソーを、次のように批判する。

「策略は、女性に自然に備わっている才能である。」(同上。163ページ)。「女性に特有な優れた技巧は、彼女たちの力が弱いということに対する極めて正当な償いである。もしこれがなければ、女性は男性の伴侶にならず、奴隷となってしまうであろう。女性が男性との平等を保ち、そして男性に従うふりをしながら男性を支配するのは、彼女の優れた技巧 (superiour art) と巧妙さ (ingenuity) によってである。女性にとっては、われわれ男性が欠点だらけ

の存在であることや、女性自身が臆病で弱いことなど、すべてのものが不利に出来ている。女性にとって有利なものといえば、巧妙さ (subtilty) と美しさ (beauty) だけである。それだから、彼女が、この両方に磨きをかけるのは当然ではないか?」(同上。164ページ)。

「ルソーは、人間の精神は何を求めるかによって違って来るのであり、小事を飲みつくすような偉大な目的を求めれば発展し、さもなければ萎縮するのだということを熟知していながら、女性に巧妙になれと忠告を与えている。」(同上)。164～165ページ)。

ルソーは、このように何重にも矛盾した主張をしている。

(11) 女性も、独立に必要なだけの体力を持ち得る

メアリは、男性が女性より肉体的に優れた能力を持っていることを認めながら、しかし女性も「美についての誤った考えがないならば、自分自身の生計の資を得る — 独立 (independence) とは正にこのことである — のに十分な肉体の力を得るであろう。」という。しかも彼女はそれだけでなく、女性たちに、男性への新たな挑戦を呼びかける。「我々女性は、子供時代だけではなく、青年期になっても男性と同じように運動が出来るように認めさせ、肉体を発展させていこう。そうすれば、男性の生まれながらの優越性とはどの程度のものか、われわれは知りうるであろう。」(同上。165ページ) と。

(12) 女性を徹底的にくだらない存在にしようとしている

ルソーは、「少女は、まだ小さいときから、可愛い仕草や、楽しげな声の調子や、軽やかな身のこなしを身につける能力がある。そしてまた、時に応じ場所や機会に合わせて、自分の姿や振る舞いを優雅に見せる能力を持っている。」とする。したがって、「未来の夫を喜ばせるためにそのような才能を磨いてもらいたいと思う」という。(同上)。これはメアリによると、「女性を徹底的にくだらない存在にしようとする (to render women completely insignificant)」試みということになる。

3. 女性と宗教

(1) 女性には、早期からの宗教教育が必要

ルソーは、「正しい宗教観念を抱くことがも少年に難しいとすれば、それは少女にとっては及びもつかないことに違いない、ということはすぐわかる。それであるからこそ、私は宗教の問題を少女には少年よりも早い時期に話し始めたい。」(同上。166～

167ページ) という。ルソーは、少女は正しい宗教観念を抱くことはできないという。その理由を、男女の理性の違いに求める。「女性における理性は実践的な理性なので、彼女たちは既知の目的に達する手段は巧みに発見できるが、その目的自体を発見することは出来ない。」(同上) と。

(2) 少女への宗教教育の進め方

では、早期からの宗教教育をどのように進めるべきなのであろうか。「女性の行動は世間の思惑に支配されている。正にその理由によって、宗教問題における女性の信仰は権威に服従すべきだ。娘はすべてその母親と同じ宗教を信じなければならないし、妻は全てその夫の宗教を信じなければならない。たとえその宗教が間違っていようとも、母親や娘を自然の秩序に服させる従順な心が、その過ちを犯した罪を神のもとでぬぐい去ってくれるからである。」(同上)。つまり、徹頭徹尾親や夫に服従する宗教教育によって、少女は教育されるべきであるとされる。メアリは、この部分に次のようなコメントをつけている。「もしも自分の母親と自分の夫の意見がたまたま食い違っていたなら、どういうことになるのであろうか? 無知な人間は、説得されても誤りを改めることが出来ない。」と。(同上)。

ルソーは、「女性の宗教を規定すべきものは権威なのだから、女性には、なぜ信じるべきかという理由を説明することよりも、彼女たちが信じるべき教義を正確に示してやることの方が必要である。というのは、あいまいな観念しか精神に与えない信仰は狂信の源となり、不条理なことを信じるように要求することは無信仰に導くからである」(同上。168ページ) という。つまりルソーにとっては、女性の宗教教育の目的は、権威に従って、自らを狂信や無信仰に走らせないようにすることなのである。ルソーは、ソフィーにさまざまな「美德と特質」を与えているが、宗教に関しては、彼女の両親に、「お前の夫が〔良いときを見計らって〕お前を教育するであろう。」といわせる。つまりルソーは、ソフィーが宗教について自立した判断能力を持つことを、認めてはいないのだ。メアリは、「こうしてルソーは女性の精神を窒息させる。」(同上) という。

4. 恋愛と夫婦の絆

(1) 恋愛の移ろいやすさと長続きする夫婦の絆

メアリは、「ルソーほど恋愛の移ろいやすい性質について強調した人はいない。」(同上。171ページ) という。「官能の快楽は一時的なものである。官能

が満足させられると、平常の愛情の状態はいつも損なわれる。我々の求めているものを美化する想像力は、現実になんか手に入ると消え失せる。」(同上)。女性がどんなに用心して慎みと恥じらいといった技巧を駆使しても、「享楽は徐々に情欲を失わせるであろう。しかし恋愛が可能な限り続いた後には、和やかな習慣がそれに代わって登場し、そして互いの信頼という結びつきが、情欲の激しさの後を受ける。しばしば子供はかすがいとなって、恋愛そのものも及ばなかったほどの心地よい永遠の絆で夫婦を結び付ける。」(同上。172ページ)。

メアリは、このルソーの主張に、次のように批判を加える。「夫婦にとっては、子供こそ恋愛よりはるかに長続きする絆だ、と彼は実際述べているのだ。夫婦が半年も鼻を突き合わせて生活すれば、美しさも大したものではなくなるであろうと、あるいは、目もくられなくなるであろう、と宣言しているのだ。技巧的な優美さや媚も、同様に感覚器官にとって飽き飽きするものになってしまうであろう、と宣言しているのだ。それなのになぜルソーは、少女は、東方のハーレムのために仕込まれるのと同じやり方で、夫のために教育されるべきであるというのか?」(同上)。

(2) 「人類の良識」(the good sense of mankind) に訴えてのルソー批判

メアリは、ルソーを「官能主義者」(sensurist) とし、「誠実さという素朴な魅力を、もはや感じることはできないのだ」(同上) という。そして、「かわいくて役には立つが知性を持っていない伴侶と一緒に生活することに満足しうるようなこの男は、肉欲を満足させているうちに、より高尚な楽しみに対する興味を失ってしまったのだ。彼は、しっとりとした天の露のように、乾いた心をよみがえらせるあの静かな満足感 — 彼を理解しうる人によって愛されているという満足感 — など決して感じたことはないのだ。この男性は、妻との交わりにおいて、獣にまで落ちぶれるときを除けば、常に孤独なのである。」(同上。172~173ページ)。「女性はつかの間の欲望の対象とされてしまうのであるから、青春時代の貴重な歳月をどう過ごすか、年を重ねたらどう社会に貢献するか、未来にどのような合理的な希望を描くか、というような考えはすべて犠牲にされてしまう。更にいえば、女性は理性を基盤に美德を築くことも許されず、真理探究を目的とすることも認められていないのに、どうしてルソーは、女性が有徳に、そして堅固になるようになどと期待しうるの

か？」(同上。173ページ)。

5. メアリの闘い

メアリは、ルソーと闘う。しかし、「私は彼の亡骸と争うのではなく、彼の意見と争うのだ。私が闘うのは、女性を恋愛の奴隷にすることによって女性を墮落に導いたあの感受性とだけなのである。」(同上。174ページ)。

メアリは、同世代の女性たちに次のように呼び掛ける。「親愛なるわが世代の友よ、このような狭い偏見を乗り越えよう！もし英知が、それ自体のために望ましいものだとすれば、もし美徳が、その名に値するために知識の上に築かれなければならぬとすれば、われわれの頭脳が心情を支配するようになるまで、思索によってわれわれの精神を強くするよう努力しよう。われわれは、日常茶飯事ばかりを考えるのは止めよう。また、恋人や夫の心についてだけに、知識を限るのをやめよう。そして、日常の義務を、われわれの精神を高めるといふ、また我々の愛情をもっと高い次元に向けて準備するといふ、大きな義務の示すところに従って実践しよう！」(同上。175ページ)。

6. 理想の男性像

メアリは、『エミール』第5章の末尾で、彼女の考える「理想の男性」について、次のようにいう。「人類がこれまで女性に負わせてきた重荷を取り除きながら、女性の理性を、正しきものみに従うというその本来の姿に戻し、そしてまた、所信を実践する、という失われていた特権を男性にも取り戻すであろう人——これが理想の男性である。」(同上。176ページ)。

7. メアリ・ウルストンクラフトのルソー批判の今日的意義。

(1) 女性解放のための今日的課題

①国連女性機関 (UN Women) の発足

2010年7月2日、国連総会は、「国連女性機関」(UN Women) の創設を決議した。この国連新機関の目的は、「ジェンダーの平等と女性へのエンパワーメント」(gender equality and empowerment of women) である。

「ジェンダーの平等は、基本的人権であるだけでなく、その達成は巨大な社会経済的結果を持つ。女性に対するエンパワーメントは、経済成長、生産性と成長の促進を助長する。

しかしながら、ジェンダーの不平等は、どの社会でも深くしっかりと根付いている。女性たちは、ほどほどの仕事にありつくことができず、職業上の差別とジェンダーによる賃金格差に直面している。彼女たちは、基礎教育や保健サービスを受ける権利を否定されることが、あまりにも多い。世界のあらゆる部分の女性は、暴力と差別に苦しんでいる。彼女たちは、政治的経済的意思決定過程において、不十分にしか代表されていない。」

(<http://www.unwomen.org/about-us/about-un-women/>)

②すべての個人の自由平等な人権とその現実

ルソーなどの近代社会思想に源を発する近代人権思想は、その後200年以上の歴史を通じて、国際連合憲章・世界人権宣言・国際人権規約・男女差別撤廃条約をはじめとする各種の人権関係の国際条約として、具体化されてきている。この過程で明らかにされてきたのは、人は性によって差別されてはならないということである。各種の宣言・条約にうたわれている平等な人権は、性の相違に関係なしに、尊重されなければならない。

しかし、ルソーの女性観・女性教育観は明らかに差別的な見方であると、ほとんど同時代を生きたメアリは、具体的に批判を加える。メアリが批判したルソーの差別的な女性観とそれに基づく女性差別の現実、今日なお世界のあらゆる地域・文化圏の中で、未解決のままに生きて存在する。この女性差別撤廃・真の男女平等実現のために、新しい国連女性機関は創設されたのである。

国連開発計画 (UNDP) によると、世界の最貧困層の60%、世界の文盲の3分の2は、女性と少女である。世界の議会人の19%しか、女性は占めていない。全女性の3分の1が、戦争あるいは家庭内で、暴力にさらされている。女性は、世界の仕事の66%を実行し、食料の50%を生産しているが、収入のたった10%しか手に入れていないし、財産のほんの1%を所有するにすぎない。

③男女共同参画社会基本法とその具体化

1999 (平成11) 年6月23日、「男女共同参画社会基本法」が成立・施行された。

我が国の女性の社会的地位指標は、諸外国に比べて低い。日本の女性は元気であるといわれる。しかし、各種の指標を取ってみると、社会的にはまだ低い地位に置かれているといわざるを得ない。国会議員・都道府県市町村議や閣僚・首長に占める女性の割合、高等教育機関・研究機関に占める女性の割合、医師・弁護士・裁判官・弁理士・公認会計士・技術

士といった専門職に占める女性の割合、女性のパート労働の比率の高さ、したがって女性の給与所得の低さ、家事育児労働の負担比率の高さなどは、我が国の女性の男性に比した社会的地位の低さを示している。

(2) メアリの女性解放思想の評価

①白井堯子の評価

『女性の権利の擁護』の訳者である白井堯子は、「訳者解説」の中で『女性の権利と擁護』は、彼女の名を不朽のものとした偉大な著作といえよう。」(同書。372～373ページ。)と評価する。

そして白井は続けて、この書物の内容を次のように要約し評価する。「女性もまた不滅の魂を持つ存在なのだから、男性と同じように、この世における仕事として、理性を磨き、美德を身につける(美德の基礎は自立)よう努力せねばならない。・・・このようにキリスト教と啓蒙思想とを基礎に、女性の高等教育、職業の自由、政治参加、財産権のみならず、21世紀を目の前にした我々もいまだに解決を見ない女性解放の問題——経済的自立、精神的自立——を、人類史上最初に、しかも驚くべき独創性と大胆さを持って主張した」と。(同上)。

②水田珠枝の評価

水田は、メアリが「男女差別、女性の隷属状態の原因を、女性に対する社会的偏見と教育の欠陥に基づく女性の無知にあると考え、これまでの女性観を批判すると同時に、「理性による女子教育」を通して、女性の自立を実現しようとした」と見る。(水田珠枝、『女性解放思想の歩み』、岩波新書、94ページ)。

8. まとめ

メアリ・ウルストンクラフトによるルソーの女性観批判は、今日的な男女平等の視点から見ても、大筋で正当なものと評価することができる。とりわけ、彼女のルソー批判の前提になっていた、ルソーの女性観理解は、ほぼ正確なものと評価できよう。つまり、ルソーは女性を、種としての共通性は持つものの、男性とは異なる優劣を比較できない性にとらえた。しかしルソーは、男女の性的交わりにおける男性の能動性・強さと女性の受動性・弱さという事実を元に、これを男女の違いに関する自然の掟と(自然法)とみなす。この視点から、女性(少女)教育論を展開する。メアリのルソー批判はそれゆえ、ルソーが主張した自由・平等な自立した個人と矛盾する女性観・女性(少女)教育観に向けられる。メア

リの主張は、女性も、肉体の力は男性より劣るが、理性・知性を持つ自立した個人として教育されるなら、男性と対等平等に諸問題に対応することのできる個人になりうるということである。

メアリの主張には、女性の理性・知性の必要性だけでなく、理性・知性がなによりゆえに女性の場合男性に劣ることになったのかについての、一定程度歴史を踏まえた現実分析がある。それは、少女教育の問題であり、少女(娘)を教育する主として母親・大人社会の問題である。母親の問題は直ちにその夫でもある父親の問題に連動する。女性を差別・軽視し、近代市民社会の指導者(支配者)になった、自由平等な市民とは、なんであったのかが問われる。近代市民とは、結局、彼女たちの夫・父親である産業資本家のことであった。その妻や娘は、夫や父親と同じ権利を持つ、自由平等な自立した個人ではなかったということである。

したがって女性たちが、近代市民社会において、男性たちと対等平等な自立した個人として生きるためには、そのことを可能にする社会的条件がなければならない。『女性の権利の擁護』の第5章だけでなく、本書全体の中で展開されている内容を踏まえると、メアリは女性の精神的心理的自立だけでなく、経済的自立・政治的自立、肉体的自立にも言及している。経済的自立は、職業能力の獲得・職業選択の自由の実現、就業の権利保障、就業のための環境整備などが必要になる。政治的権利についていえば、参政権(選挙権・被選挙権)、思想・言論・出版・信教・表現の自由権の保証が必要になる。肉体的権利についていえば、健全な肉体を形成・維持することができる社会的・物理的条件が必要になる。

彼女は、さらに進んで、男女の性の交わりにおける自由平等とでもいべきものに言及している。交わる男女が、互いに満ち足りた思いを抱くことのできる性的交わりがある、と考えている。一方的な暴力的な交わりではない、合意と協力に基づく性的な結びつきがあると考えている。

今日なお解決されていない、女性差別に係る多くの問題を、近代市民革命期に、彼女がほぼ網羅的に提出した歴史的意義は大きい。(了)

注1：白井堯子、「訳者解説」、メアリ・ウルストンクラフト、白井堯子訳『女性の権利の擁護』、未来社、369ページ。Mary Wollstonecraft, A Vindication of the Rights of Women and A Vindication of the Rights of Men, Oxford

World's Classics.

注2：「ルソーは近代を開いた思想家の中で最も大きな地位を占めている一人である」、平岡昇、「ルソーの思想と作品」、『世界の名著、ルソー』、30、中央公論社、7ページ。

注3：原語はbesoin。ここでの『エミール』は、今野一雄訳、岩波文庫を使用する。6ページ。以下今野訳と略。besoinの樋口謹一による訳語は、「欲求」。『ルソー、エミール、下、ルソー選集、10』、樋口謹一訳、白水社、65ページ。以下樋口訳と略。J. J. Rousseau, *Émile*, *Œuvres*

completes IV, p.692.

注4：今野訳、6～7ページ。ここでのルソーの「種」espèceの概念は、もちろんチャールス・ダーウィン（1809～1882）以降の、進化するものとしてのそれではない。しかし彼は、近代的分類学の創始者であるカール・フォン・リンネ（1707～1778）とほぼ同時代人であり、リンネの「種」の概念は知っていた。リンネは、「種は神の創造したものとし、神の財産目録を作ることこそが彼の目標とした。」（『現代科学思想事典』講談社現代新書）。